慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ランボー「喪」と「不寝番」の諸相
Sub Title	Some notes on Rimbaud's "deuil" and "veille"
Author	山口, 佳己(Yamaguchi, Yoshimi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1979
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.38, (1979. 2) ,p.135(26)- 160(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00380001-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ランボー「喪」と「不寝番」の諸相

——Les enfants en deuil regardèrent les merveilleuses images——Rimbaud
——Il n'y a pas chez Rimbaud d'image isolée——Madeleine Perrier

山口佳己

そののっけから，ランボー Arthur Rimbaud には「喪」deuil の意識がつきまとっている。

Puis, la chambre est glacée...on voit traîner à terre,
Epars autour des lits, *des vêtements de deuil*
L'apre bise d'hiver qui se lamente au seuil
Souffle dans le logis son haleine morose!
On sent, dans tout cela, qu'il manque quelque chose...(1)

上に引いた五行の詩句は，ランボーが自覚的に母国語で書いた，現存する限りでの最初の詩篇「孤児たちのお年玉」の極く一部だが，その標題といい，この「喪服」のイメージといい，これらは以後のランボーの詩的歴程とのかかわりに於いて，きわめて象徴的である。

寒い寝部屋に散らばる「喪服」。それは文字通り何かが喪われてしまったことを表わしている。「孤児たち」という当の詩篇の標題からして，案に違わず，その喪われてしまったものは，この作品の主人公たる子供たちの両親 (—ces enfants sont sans mère./Plus de mère au logis!—et le père est bien loin!) なのだが，この悲しくも不吉な〈喪失〉の主題は，ユゴー Victor Hugo やミュッセ Alfred Musset やボードレール Charles Baudelaire たちからの文学的影響やその模作性を取沙汰するのみでは，さほど理解の扶けにはならないだろう。

しかし，ランボーの初期作品には，模作や剽窃の類が確かに目立つ。と

りわけ模作というものは，ボードリー Jean-Louis Baudry も述べているように[3]，それ自身が依って立つ「反復のメカニズム」に就いての無知をその特質とするものであり，他の作品に同化することによってその作品を無化するがゆえに，その作品の存在を意識しないし，それ自身が必然的に組み込まれている「間・テクスト的」な状況についてもやはり無意識的である。それゆえ模作のこのような無意識性に留意しながら，ランボーの初期作品に目を通すとき，われわれはその作品からはじき出されて他の作品へ否応なしに〈回送〉される苛立ちをたしかに覚えさせられはする。

とはいえ批評や研究は，それらがもしも作品の隠れた構造の摘出を目的とするのであれば，いわば作品の持つ他の作品への〈回送力〉に安易に〈相乗〉すべきでない。なるほど，如何なるテクストも，それは「間・テクスト的」intertextuel なテクストであるがゆえに，他のいずれかのテクストに〈回送〉されたり拘束される可能性をその一面に孕んでいよう。それゆえルネヴィル R. de Renéville[4] や，スターキー Starkie[5]，ジャングー J. Gengoux,[6] リシェ J. Richer,[7] カドー P. Caddau,[8] フランケル M. Frankel[9] 等の，作品同志の類縁関係の指摘の試みや，それぞれ典拠は異なりはすれ，ランボーを過去のテクストの鋳型に合わせて切りとる作業に，一応の〈真実らしさ〉と〈説得力〉が認められはする。しかしこの系列の試みや作業ほど曖昧なものはまたとないのだ。何故なら，いま挙げた諸家のランボー研究の，共通の特質が何かといえば，それは過去の〈特定〉のテクスト（そのテクストを当のランボーが読んだか否かは，まるで定かでないのであるが）への排他的な照合による教義的ランボー解釈であるがために，その照合と解釈の厳密性が細部に亘って増せば増すほど，逆に作品の生きた深層構造からの皮肉な離反が際立つからである。

だが，ランボーの作品群を見渡した場合，キタン Atle Kittang[10] の分類を見ても解るとおり，〈喪失〉の主題も含めたそれらのモチーフの多様性（神話的なまた半ば哲学的なテクスト，革命歌，田園詩，諷刺詩，猥文学的作品，等）は，様式ジャンルの根本的な不安定性（叙事詩的，演劇的，諷刺的，悲劇的といった具合に順ぐりに変わる）や，あまたの剽窃，模作，

借物，影響などによる「表現の真物性」の欠如などと相俟って「倍加」されてはいるが，その各々の主題そのものに，ランボーの独自性を認めることは，なるほど困難だと言わねばならない。

しかしながら，ランボーの最大の特質をなすものが何かといえば，それは人間の幼・少年期を支配する〈直接性〉だ。そこで，マラルメ Stéphane Mallarmé の言う「個人的な事例」cas personnel への視座にも擬して，この〈喪失〉の主題の内実を吟味してみると，いわゆる「文学的コード」code littéraire の枠組から溢れでるかのようにして，その作者たる少年詩人の生なましくも屈曲した心理の像が見えてくるようである。

すなわち，この「孤児たち」の詩篇に於いて，父親の不在 (le père est bien loin) の視像が，現実面での詩人の父親ランボー太尉（この父親はランボーが6才の折に母親との別居生活に入り，その後一度たりとも家族の前に姿を現わさなかった）の不在とも重なり合うのはともかくとして，身近に起居する母親が，詩篇のなかで〈死〉に至らされているふしが見えてくるのは，いったいなぜか。これは，およそ尋常な心理過程の発露とは受けとめかねる。だが，この屈曲の説明は存外簡単につくようである。

それはまず，この詩が書かれた時点（1870年）での母親のランボー夫人が，言葉の不思議な力による詩人のこのような奇妙な〈制裁〉に，いかにもふさわしい人物だったということである。此処では詳しくは述べないけれども，この母親は，凡そのところ伝記の類で周知のとおりの固陋，吝嗇，偏執，狂信，専制を旨とする〈鉄の女〉であったことにほぼ間違いはない。おのれの「専制王国」の〈秩序〉や〈原理〉にそぐわないものについては，おそろしいほど冷厳な態度をとれる人物であったのだろう。そしてそのような人物であったればこそ，息子ランボーが詩篇のなかでそうした彼女を「やさしい母」として〈粉飾〉したり〈消去〉したのと同じように，彼女は己を捨てた夫の存在を，その在世中から死者として喪服の類で〈粉飾〉しつつ，自らを「未亡人」veuve と呼ぶことにより，〈消去〉しえさえしたと言える。つまりそこでは，夫に対する彼女の〈制裁〉と，彼女に対する息子の〈制裁〉が，別の回路を経てではあれ，ものの見事に吊り

あったのである。

従って，「孤児たち」の詩篇に出てくる「喪服」の類は，文字通り現実との直接的な対応による所産とは言わないまでも，単にロマン派やボードレールの文学的影響や文学的主題の展開以上に，母親のランボー夫人の断固たる喪服姿や，日々の家庭内の暗く冷たい〈喪〉の雰囲気の，無視しえぬ反映だと考えられる。そしてかかる雰囲気があったがゆえに，息子がのちほど『地獄の季節』Une Saison en Enfer で，「両親よ，あなたがたがわたしの不幸をつくり出した。またあなたがたの不幸をもつくり出した」Parents, vous avez fait mon malheur et vous avez fait le vôtre[11] とか，「不幸がわたしの神であった」Le malheur a été mon dieu[12] などと述べるのにも似て，その母親が娘イザベル Isabelle への手紙（1900年5月）のなかで，「何を話すことにしましょうか。人生のありとあらゆる苦しみを味わう宿命（さだめ）にある人々がいるわけですが，わたしはそうした人々に属しているのだよ[13]」と書きしたためるとき，これら奇怪な親と子は，彼らより他人の方が不幸だと人には決して言わせまいとする，揺るぎない不幸の〈独占的共同体〉をも形造りえたのである。

ともあれ，「孤児たち」の詩篇に於ける「母親」の死は，「鉛の帽子を被った 73 のお役所ほどにも手ごわい[14]」母親に対する詩人の反撥の表われでもあれば，かつてはやさしかった（と推定しえなくもない）母親に対する愛惜の念，あるいは〈願わしい〉母親への思慕の表われでもあるという，彼の両義的な感情の半ば無意識的表出によるものであるが，その母親がただ別居中にすぎぬ夫の存在を〈消去〉して自らを「未亡人」と名乗ったように，今度は息子のランボーがその母親を〈消去〉して自らを「孤児」と名乗って出たことは，かなり重要な出来事である。つまり，〈真〉=〈偽〉の母親は此岸にあって，〈偽〉=〈真〉の母親は彼岸に去っている，——この様な〈真〉と〈偽〉との逆転関係がもたらす不可思議で玄妙な効果のなかに，言葉に対するランボーの感覚の逸早い目ざめがあったと言いうるからである。

だが，それにしても，〈真〉=〈偽〉の母親の（ここでは詳しく触れないが）如何にも厳しい絶対的な監視 Surveillance のもとにあって，ランボ

ーの「喪」の意識に連なるこの「孤児」の感覚は，のちほどの「やもめ」veuf のそれと相俟って，彼の強烈な「流謫」exil の感情を形造っている。

Je suis dépaysé, malade, furieux, bête, renversé ; ... On est *exilé* dans sa patrie !!![15]

Ces écritures-ci sont d'un jeune, tout jeune homme, dont la vie s'est développé n'importe où ; *sans mère, sans pays*, ...[16]

Non ! nous ne passerons pas l'été dans cet avare pays où nous ne serons jamais que des *orphelins* fiancés.[17]

上の3つの引用文では，追放，宙吊り，転倒，喪失，疎外の状態が描かれているのであるが，ランボーの言う「孤児」にせよ，「やもめ」にしても，それらは単に親や伴侶の喪失を意味するだけでなく，彼をとりまく世界との仕合せで全体的な合一感覚，彼の言葉に従えば「太古の青春」l'antique jeunesse[18]「昔の饗宴」festin ancien[19]「原初の真卒」franchise première[20]「太陽の息子という本源の状態」état primitif de fils du Soleil[21]などの喪失を意味しているのは勿論のことである。そしてこのような〈喪失〉や〈流謫〉による「喪」の意識は，ランボーの死に於いてしか彼と離れることのなかったあの度し難い倦怠と同様に，その全生涯をつらぬく強迫観念の様相を帯びるに至る。それゆえ「孤児たち」の詩篇に限らず，「喪」の映像は，様々な変容を伴いながら，間歇的ではあるものの，彼の創作期に限ってみてもその全期に亘って止絶えることなく立ち現われる。

Et [Dieu] se réveille, quand des mères, ramassés
Dans l'angoisse, et pleurant sous *leur vieux bonnet noir*,
Lui donnent un gros sou lié dans leur mouchoir[22] !

Par milliers, sur les champs de France,
Où dorment des morts d'avant-hier,
Tournoyez, n'est-ce pas, l'hiver,

Pour que chaque passant repense!
Sois donc le crieur du devoir,
O notre *funèbre oiseau noir*[23]!

Je n'aurai pas eu les tourments de l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sevère comme *les cierges funéraires*. Le sort du fils de famille, *cercueil prématuré couvert de limpides larmes*.[24]

Je suis *en deuil*, je pleure, j'ai peur.[25]

Dans la grande maison de vitres encore ruisselante *les enfants en deuil* regardèrent les merveilleuses images.[26]

Du désert de bitume fuient droit en déroute avec les nappes de brune échelonnées en bandes affreuses au ciel qui se recourbe, se recule et descend, formé de la plus sinistre fumée noir que puisse faire *l'Océan en deuil*, les casques, les roues, les barques, les croupes.—La bataille[27]!

L'ardeur de l'été fut confiée à des oiseaux muets et l'indolence requise à *une barque de deuils* sans prix par des anses d'amours morts et de parfums affaissés.[28]

La terre avait des versants fertiles en princes et en artistes, et la descendance et la race nous poussaient aux crimes et *aux deuils*[29]: ...

Henrika avait une jupe de coton à carreau blanc et brun, qui a dû être portée au siècle dernier, un bonnet à rubans, et un flard de soie. C'était bien triste *qu'un deuil*.[30]

「喪」の意識あるいはその映像と言ってはみても，単に比喩的な，改め

て検討の要もないものも上の引用には含まれている。しかし，なかでも「大洪水のあと」Après le déluge に登場する「喪服を着た子供たち」les enfants en deuil というのは，とりわけ重要な視像だと考えられる。ここでもなぜまた「喪服」なのか。

「喪服を着た子供たち」は，恐らくは洪水直後の，「まだ水のしたたる大きなガラスの家のなかで，世にも不思議な光景を見つめ」ているのだが，この「子供たち」は，まえの「孤児たち」の詩篇に於ける「子供たち」と同様に作者に常住の〈喪失〉感の心的投影の所産でもあれば，更には詩篇「飢餓の祭」Fête de la faim のなかの「洪水の息子」 fils des déluges である「河原の玉石」les galets[31] にも似て，「洪水」という巨大なカオスに置きざりにされた存在とは考えられまいか。しかもカオスとは，語源的にはギリシア語で「空無の深淵」を意味する以上，それはランボーの存在論的な「渇き」や「飢餓」による胃腑の〈空無〉と対応して，内と外との全空間を浄化するひとつの力を表わすものと解されてよい。それゆえ，子供たちが「喪服」を着ているのは，彼らの原初的母胎でもある「混沌」＝「洪水」，すなわち革命のイメージにも繋がる破壊的な浄化力の退潮を惜しんでのことであり，「洪水」以前の旧事態の復元が，ベルナール S. Bernard も指摘しているように （ガルニエ版，p. 479），「子供たち＝作者」の次のような「悲しみ」tristesse や「倦怠」ennui の感情を呼びさまし，また新たな「洪水」への願望をかきたてるのだ。

—Eaux et tristesse, montez et relevez les Déluges.

Car depuis qu'ils se sont dissipés,—oh les pierres présieuses s'enfuissant, et les fleurs ouvertes!—c'est un ennui[32]!

さらにまた，先に挙げた「首都の景」Métropolitain に出る「喪に服した大海原」l'Océan en deuil とはいったい何か。この一節は標題との関連からして，煙霧と排液に汚された，かまびすしい工業都市の情景を「戦い」に見たてて創られた模様であるが，この「大海原」のイメージは，「陶酔せる船」Bateau ivre の終節近くの「悲しみに沈む少年が，5月の蝶さな

がらの笹舟を放つ黒く寒々とした水溜り」(la flache/Noire et froide où vers le crépuscule embaumé/Un enfant accroupi plein de tristesse lâche/Un bateau frêle comme un papillon de mai.)[33]——すなわち，精気のない「ヨー ロッパの水」une eau d'Europe[34]——と相重なって，水というものに託したランボーのサンボリスムから言えば，生命産出の母胎としての原初的な力や，もはや逆巻き荒れ狂うことによって人間界を浄化する力を喪った海だとも受けとれなくはない。そしてこの推定に依って立つ時，『イリュミナシオン』Illuminations 中の一詩篇「民主主義」Démocratie の「胡椒をふりかけた水びたしの国」pays poivrés et détrempés[35] という章句のなんたるかも，かなりはっきりとするようである。

すなわち，「胡椒」とは，食物の調味とともに，腐敗の防止と臭気の緩和の役割を担い，「水びたし」とは，大雨か洪水のあとの泥濘の支配状態を指していようから，力なく澱んだままで今や現状以上に〈腐敗〉しないことだけが殆んど最大の課題となったかの観を呈する西欧社会が詩人の眼前に拡がっている。そしてランボーは，このような「水溜り」，「水びたしの国」を称して，次のように言うのである。

M'étant retrouvé deux sous de raison—ça passe vite!—je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident. *Les marais occidentaux*[36]!

「西欧の沼沢地」。これはその泥濘の粘着性によって詩人の自由や存在感覚を転倒させるものの謂であろう。そしてこの澱んだ「沼沢地」に棲む同語反復的人間を巡り，ランボーはまた次の様にも書くであろう。

—Mais n'y a-t-il pas un supplice réel en ce que, depuis cette déclaration de la science, le christianisme, l'homme *se joue*, *se prouve* les évidences, se gonfle du plaisir de *répéter* des preuves, et *ne vit que comme cela*!... M. Prudhomme est né avec le Christ.[37]

しかも，この「沼沢地」に棲む人間「プリュドム氏」は，ニーチェ Nietzsche の語った「最後の人間」と何と似通っていることだろう[38]。ニーチェの「最後の人間」が，「舞踏する星」を産み出す混沌の力を失い，ただ一切を「矮小」」にしながらも「地蚤のように根絶やしがたい」人間であるのにも似て，ランボーの「プリュドム氏」もまた，「劣等種族」の一員として猖獗に「すべてを覆う」(La race inférieur a tout couvert[39]) 根絶やしがたい人間であり，この人間が所属する「血統と種族」が，先の引用 (la descendance et la race nous poussaient aux crimes et aux deuils) にもあったように，これまた詩人を「犯罪と喪」に追いやるのであり，「沼沢地」で「もの憂い眼」œil morne に見据えられ[40]たまま動きのとれない (cannot immobile) 詩人の頭上を，戦乱期の「喪服の鳥」funèbre oiseau noir[41] が舞い続けるのだ。

従って，絶対的な〈監視〉surveillance のもとにランボーを存在論的な「喪」deuil と「通夜」veille に追いやるものは，単に「不透明性」opacité の体現者としての母親のランボー夫人ばかりではない。彼を「死も同然」の状態に陥しめる「悪しき絶対 (le mauvais absolu)」(Yves Bonnefoy[42]) としてのプロヴァンスや「沼沢地」としての西欧市民社会がありもすれば，「正義の人」L'Homme juste として「永遠に人間のエネルギーを盗み去る者」éternel voleur des énergies[43] であるキリストが居り，更には超越的な次元から宇宙の「絆」や「あやまつことなき巨大な運行」を統べる「永遠の夜番」éternel veilleur, すなわち「**秩序**」，神がいる。

Cependant que silencieux sous les piastres
D'azur, allongeant les comètes et les nœuds
D'univers, remuement énorme sans désastres,
L'Ordre, éternel veilleur, rame aux cieux lumineux
Et de sa drague en feu laisse filer les astres[44]!

自由精神は，それがいったい何であろうと，単に永続するものを否定する。「秩序が，《永遠の夜番》が，彼に嫌悪の念を起させるのだ[45]」とブラ

ンショ Maurice Blanchot も語ったように，その母親と同様に絶対的な「監視」のもとに彼を存在論的な「喪」と「通夜（ヴェーイュ）」に追いやるところのキリストや「永遠の夜番」に対して，ランボーは激しい叛逆精神をはぐくむに至る。

Barbe de famille et poing de la cité,
Croyant très doux : ô cœur tombé dans les calices,
Majestés et vertus, amour et cécité,
Juste ! plus bête et plus dégoutant que les lices !
Je suis celui qui souffle et qui s'est révolté[46] !

さらに，ベリッション Paterne Berrichon とヴェルレーヌ Paul Verlaine の証言[47]によれば，現在散佚したままではあるが，ランボーに「夜番たち」Veilleurs と題された作品があったというのは，この際とりわけ重要である。かりにリュフ Marcel A. Ruff がヴェルレーヌの記憶の曖昧さやその恣意性をなじるにしても，リュフの側にも反証の定かな根拠が欠如しており，問題の解決にならないようだ[48]。しかし，ランボーの「夜番」に対する意識をめぐる此の小論の視座からすれば，ひとりの詩人の精神の必然的な展開の一所産として，「夜番たち」と題された作品（あるいは一歩譲って，内容的に「夜番たち」のことを描いた作品）がかつて存在したというのは，さほど不思議とするに足りない。なぜなら，「ランボーの最も見事な作品のひとつ」とヴェルレーヌも語ったように，この時期すなわち1871年のランボーが，如何に「夜番」を意識していたかが，なお一層首肯しうるからであり，また，現存する作品群の隠れた構造を仮構することは，隠れた不在の作品の現存性をも構造的に保証しうる可能性をときに孕んでいて然るべきだからである。

だが，「夜番」veilleur とは，仏語に於いては正確にはどのようなな意味を持つのか，さらにこの辺で念のため調べておこう。19世紀後半の作家の語彙を調べるのには，「リトレ」Littré の辞典が好適だから，それに従い此処では仮訳の「夜番」veilleur の語義を，これより以下に並べてみよ

う。

① Celui, celle qui ne dort pas, ou dort peu la nuit.

② Gardien ou gardienne de nuit.

③ Celui qui veille un mort.

④ Celui qui, dans certains fabriques, est chargé de parcourir pendant la nuit les bureaux, les ateliers, les corridors, etc. pour s'assurer que le feu ne couve sur aucun point.

⑤ Le veilleur de nuit, celui qui la nuit, en Allemagne et en Suisse, annonce les heures en chantant.

④と⑤とはともかくとして，①は「徹夜をする人，あるいは僅かしか眠らない人」，②は「夜番（不寝番）」，③は「死人の監視（見張り）をする人（通夜をする人，あるいは通夜僧）」の意味を持っている。これらに当然に共通する語義というのは，夜のあいだ寝もやらずに何かを見張って（監視して）いる者，である。そしてこの語義は，詩人の「夜番」の形而上的な意味内容や，「喪」の存在論的な意義との関わりに於いて，きわめて重要のようである。なぜなら詩人が「**秩序**，永遠の夜番」L'Ordre, éternel veilleur というように大文字の「**秩序**」と「夜番」とを文法的に同格にして書いているのは，この語義を相当に意識していたに相違ない詩人の「**秩序**」観の内実を，かなり明白に物語るからである。それは，たとえばアダン Antoine Adam が言うところの「夜番」が「秩序」の「防禦者」であるばかりでなく[49]，「**秩序**」が「夜番」そのものであるという詩人の認識を示していよう。「**秩序**」が永遠に眠ることのない，絶対的な「監視者」veilleur そのものとして，詩人から「自由な自由」liberté libre[50]と「活力」を盗み去り（ここでは「永遠の夜警」éternel veilleur が，こともあろうに「永遠の泥棒」éternel voleur des énergies でもあるというランボーの「秩序」観に留意しよう），彼を〈死人〉の状態に追いやるのである。

かく言うわけで，パリ・コミューンの蜂起と鎮圧の年でもあった1871年のランボーが，その革命思想と反キリスト教的思惟を盛り込んだ諸作品の

活溌な展開をとおし，人間解放の力を拉ぐ「**秩序**」すなわち「永遠の夜番」に対してどれほど熾烈な対抗意識を抱いていたかがよく解るはずだ。彼はそこで，この「永遠の夜番＝永遠の不眠の監視者＝永遠の盗人」，つまり人間の地上での存在理由の瑞瑞しい循環を疎外する者，詩篇「大洪水のあとで」に出てくる「魔女」Sorcière と同じく，万象の「潜勢的な誕生」naissance latente[51] の秘密を占有する者を敢然として克服しようとつとめるだろう。だが，その乗り超えの試みは，どのようにして遂行されるのか？

それはおそらく，「活力の永遠の盗人」に対してプロメテ的な「火の盗人」voleur de feu[52] に詩人がなろうとしたのと同じく，「永遠の夜番＝監視者」以上に詩人自らが「不寝番」veilleur となって「目覚め veiller＝見張り veiller」続け，いわゆる「高揚の暁」aube exaltée[53] に向けて悲惨な「通夜」veillée を，「未知なるもの」l'inconnu の発見のための「夜明し」veillée (veille) に転化・逆転することによってであろう。すなわち，「見者の手紙」にも見られるように，如何にその苦しみが大きかろうと (le souffrance est énorme)[54]，世界の終焉に至るまで「目覚め」かつ「見張って」surveiller いること，——此処には「見る」ことを介して「喪」から「驚異」へ突き抜ける (les enfants en deuil regardèrent les merveilleuses images) という彼のポエジーの根本原理が踏まえられていもすれば，ひとつの闘いを展開するには，その敵対者にいくばくかは似ることが時に不可欠であるという一個の弁証法的認識が秘められてもいるであろう。そしてこのような詩人の「不眠」veille の決意については，ダニエル・ロプス Daniel Rops も「この詩人（ランボー）の偉大さは，キリストやパスカルと同様に，世界の終焉までその苦悩のうちにも眠らないことを決意したところにある」[55]と言及している。世界壊滅の光景を描いた次の断章は，このことを明白に語っていよう。

Non! Le moment de l'étuve, des mers enlevées, des embrasements souterrains, de la planète emportée, et des exterminations

conséquantes, certitudes si peu malignement indiquées dans la Bible et par les Nornes et qu'il sera donné à l'être serieux de *surveiller.*—Cependant ce ne sera point un effet de légende![56]

ところで，詩人はどのようにして，不毛な「通夜」veillée を，おのれ固有の原理に即した「夜明し」veillée (ou veille) に転化・逆転しているだろうか。それはまず，おのれ固有の「夜明し」に別の新たな「聖性」を賦与することによってであろう。つまり詩人は大文字の「**秩序**」Ordre に対するおのれの「無秩序」désordre を「神聖な」sacré ものと見なす (Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit[57]) かたわら，おのれ固有のその「夜明し」veille をも「聖なる」saint ものと見るであろう。そしてその「覚醒」veille のための「方法」として，「見者」voyant の処方 (il épuise en lui toutes les poisons[58]) にも示されていた，「毒薬」poison の援用さえもが肯定されるのだ。

... *sacrés* soyez-vous par le souvenir de cette *veille*....

. . . . . .

Petite *veille* d'ivresse, *sainte*! quand ce ne serait que pour le manque dont tu nous as gratifié. *Nous t'affirmons, méthode*! Nous n'oublions pas que tu as glorifié hier chacun de nos âges. *Nous avons foi au poison.*[59]

上の詩句は「陶酔の朝」からの引用で，この作品は諸家の指摘でも周知のとおり，阿片や大麻といった類の覚醒剤の使用体験が土台となって産まれたようだが，その覚醒と陶酔の極みに於いて，さらに詩人は「永遠の夜番」の監視を超えておのれ固有の**善**と**美** (O mon Bien! O mon Beau![60]) を見出すに至る。そしてこのような「覚醒」veille に向けての一連の試みのなかで，下記の「夜明し」Veillées と題された，その光源の在りかや実体がいっさい不明の不思議な「光」に照らされた作品が産まれたのであろう。この作品は，ラコスト Bouillane de Lacoste に依れば「生への興趣を取り戻す快癒者の仕合わせな吐息[61]」の表われということなのだが，ここ

ではむしろ「～でもなければ～でもない」(ni～ni) という否定の副詞の多用によって，陶酔の極みに於ける感覚閉止，一種の喪心，一種の〈判断中止〉の状態が表出されているものと考えられる。

C'est le repos éclairé, ni fièvre, ni langueur, sur le lit ou sur le pré.

C'est l'ami ni ardent ni faible. L'ami.

C'est l'aimée ni tourmentante ni tourmentée. L'aimée.

L'air et le monde point cherchés. La vie.

—Etait-ce donc ceci?

—Et le rêve fraîchit.[62]

だが，このような「覚醒」への試みのさなかにあって，ブランショも語ったように[63]，ランボーほど休息や眠りへの度し難い欲求を表明した人間もいないのではないか。ざっと挙げても，「一番いいのは砂浜でしたたか酔いつぶれて眠ることだ」Le meilleur, c'est un someil bien ivre, sur la grève.[64]「燃えさかる塒の中での眠り」sommeil dans un nid de flammes[65]「純潔の眠り」Sommeil de la virginité[66]「ぼくの失墜と眠り」ma chute et mon sommeil[67]「ぼくの眠りの柩車」Corbillard de mon sommeil[68]「ああ，眠りたい，沸き立ちたい」Que je dorme! que je bouille,[69]「ぼくの眠りとぼくの極微の身うごきが生まれてくるあの地域を返してくれる見事な腕はどれだろう。結構な時はいつだろう。」Quels bons bras, quelle belle heure me rendront cette région d'où viennent mes sommeils et mes moindres mouvements?[70] 等等といった具合だ。そしてこの「眠り」への欲求は，通常考えられる眠りへの要求とは，如何なる点に於いても似通ってはいない。まさにそれは，ブランショの指摘通りの，「得体の知れないだらけた期待や，すでにしびれて，鈍く，従順な性質と結びつくのではなく，火を掻き立て，灼熱した要素を呼び，その要素から熱狂的に

させられる痛烈さ，癒されるためには枯渇しか望まない枯渇，焔と毒の不毛を求める石と砂の不毛などと結びつく[71]」類のものだ。なるほど，「海のように貪欲になろう」Soyons avare comme la mer[72]と言い，またたとえ神の到来を待ち受けるにしても際限なしに「がつがつ」J'attends Dieu avec gourmandise[73]していると言う彼のことだ，その求めてやまぬものが休息であれ，眠りであれ，怠惰であろうと，それらに対して彼は常に「がつがつ」しており，しかもそれらは簡単に手中にされたりするものであってはならず，そのいずれもが彼にとっては「灼熱的」で，「痛烈」で，「熱狂的」で，その行きつくところ，酷い快哉の叫びをあげさせる体のものでなければならなかった。そしてこのことは，彼の最後の拠り所の「忍耐」さえもが，やはり「燃えるような忍耐」ardente patience[74]であったことを想い起せば了解されよう。地獄の渇きを覚えながらも彼が普通の水ではなしに「火の一しずく」une goutte de feu[75]を要求し，飢餓のさなかでその腹腔を充たすものとして，岩，石炭，鉄の類を掻き集めたのもかかる理由によるのであろう。つまり，できるだけ〈飲まない〉ことにより〈飲めない〉ものを，できるだけ〈食べない〉ことにより〈食べられない〉ものを要求すること[76]——これは最大の「渇きを」をとおして最大の「洪水」を飲むためであり，最大の「飢餓」をとおして最大の「饗宴」に加わるためのものであるのだ。そしてこのことは，彼の「覚醒」とブランショの言う彼の「眠り」についても言いうるだろう。——すなわち，彼はできるだけ〈眠らない〉ことをとおして〈目覚めていない〉状態を貪婪に求めることにより，極限の「覚醒」と極限の「眠り」に到達しようと願ったようである。あるいは，激しく「覚醒」を求めた分だけ，「眠り」の欲求が強化されたとも言える。しかも，モンドール Mondor の言う「性急な[77]」彼にとっては，「〜をとおして」という時間的遅延は許されなかった。彼ほど，なまの，「翻訳」のない (Je réservais la traduction[78]) 直接・即刻の保有 (possession immédiate[79])を望んだ人間もまたいないからである。それゆえ彼の願望は，常にと言ってよいほど，背反する二極への同時的到達を目指す。——水と同時に火を，行為と同時に休息を，存在と同時に不在を，そして

覚醒と同時に眠りを，といった具合にだ。またこのことは，精神と肉体，彼岸と此岸の関係についても同様であり，根本的には悪しき古典的二元論の克服が，詩人の最大の課題のひとつであったこと[80]を物語っている。

Le loup criait sous les feuilles
En crachant les belles plumes
De son repas de vollailles :
Comme lui je me consume.

Les salades, les fruits
N'attendent que la cueillette ;
Mais l'araignée de la haie
Ne mange que des violettes.

Que je dorme ! que je bouille
Aux autels de Salomon.
Le bouillon court sur la rouille,
Et se mêle au Cédron.[81]

ベルナール Suzanne Bernard は，この詩篇の「定かな意味」を求めることに，あまり熱意を覚えていない模様であるが[82]，この作品をそのまま放置しておいて果してよいか。この作品は，単に彼女が言うように，「乾燥や猛烈な死の主題」と「みずみずしい春や食用野菜の主題」とを「混ぜ合わせた」だけのものではどうやらなさそうである。なぜなら「狼」が，元来〈食べられない〉，消化に適さぬ羽毛を食べて「やつれる」のも，あるいは「垣根の蜘蛛」が滋養に富んだサラダや果実ではなく，スミレばかりを食べて「やつれる」のも，それは単に〈自然的〉であってはならない「見者」の企図の内実の表出だと解しうるからだ。そしてまた，最終連の「眠りたい／沸りたい」(Que je dorme ! que je bouille) とは，極限の深い眠りと，殆んど死にも瞬間的に重なるような極限の白熱的な覚醒 veille への

願望をおそらく表わしており，それら二極の絶対的に背反するものへの同時的願望は，この詩篇に於いてはあたかもひとつの円環を閉ざすかののように，ひとつの麻痺，ひとつの脱我状態の裡に重ねあわされる。「沸り立った」詩人の存在の精髄,「気泡」bouillon は，ちょうど彼の別の詩篇「永遠」L'Eternité に於いて太陽（火）と海（水）が混りあう（mêler）のと同じように，灼けた「錆」rouille のうえを馳けぬけて一種の感覚閉止裡に聖なる「ケデロン」の流れに混りこむ（mêler）のである。

だが，ランボーに於いては，この「混りあう」(mêler) ことが，異文(次に引く異文の方が，アイゲルディンガー Marc Eigerdinger も指摘しているように[88]，詩篇としての完成度が高いのであるが）にも見られるように「行ってしまう」(aller) ことでもあったのは興味深い。ひとつの円環構造や融合状態は，ランボーに於いては直ちに破れ，常に別の力動性にその座を譲るのだ。

Elle est retrouvée.
Quoi ?—L'Eternité.
C'est la mer allée (mêlée)
Avec le soleil.[84] (Au soleil)

すなわち，この「再発見」された「永遠」は，詩篇「陶酔の朝」Matinée d'Ivresse に於ける「即座に捉えられない永遠」(ne pouvant nous saisir sur-le-champ de cette éternité[85]) と同じように，瞬間的に垣間見られはするものの，すぐまた「行ってしまう」類のものなのだ。そのうえ，「けものの至福」felicité des bêtes[86] を与えてくれる「眠り」への欲求もさることながら，極限の「目覚め」veille のなかで「永遠の夜番」に抗して「見張り続ける魂」âme sentinelle にその瞬間的な永遠が与えられるのは，「虚しい夜」nuit si nulle という光の殆んど全的な不在か，「火だるまの真昼」jour en feu という光の過剰な目くるめく充満を経ることによってのみである。その「魂」に実際に〈見える〉ものなど何ひとつとしてありはしないのだ。あるいは，詩人が「見者の手紙」で「未知なるものに到

達し，狂乱の挙句，そのヴィジョンについての識別能力をたとえ失おうとも，彼（詩人）は見たものは見たのだ」Il arrive à l'inconnu, et quand, affolé, il finirait par perdre l'intelligence de ses visions, il les a vues[87] と述べているように，かりにその「魂」が何かを本当に〈見た〉としても，一種の眠りに似通った極限の覚醒の感覚閉止の状態に於いては，その〈見た〉ものが何であるかを識別できない[88]。ランボーの「未知なるもの」とは，まさにフーゴー・フリードリヒも指摘したように[89]，「緊迫をかきたてるための無内容な対極」，「無色透明な振動」の相関物であるかも知れないのだ。それゆえ，詩人の「見張りつづける魂」が，次のように「ぶつくさこぼす」murmurer のも，それはおそらく無理からぬことなのである。

Ame sentinelle
Murmurons l'aveu
De la nuit si nulle
Et du jour en feu.[90]

さらに詩人は，ひとつの「閉域」clôture[91]としての「西欧の沼地」の「人間どもの同意」humains suffrages[92] や「通俗的な逆上」communs élans[93] を乗り超えた「隠棲者」，あるいはマドレーヌ・ペリエ Madeleine Perrier も述べたように「一番高い塔」のうえの「不寝番」(...Rimbaud, retraite en la plus haute tour. Il est le veilleur.)[94] として，おのれを超える神的な至上の存在を認めないがゆえに，もはや彼には「昇天」orietur の目標は存在しないし，地獄堕ちの可能性も存在しない。なぜなら，詩人自身が語ったように，「地獄は異教徒を攻めたてえない」l'enfer ne peut attaquer les païens[95] からだ。そこではただ「見者＝不寝番」voyant＝veilleur としての我慢強い探究 (Science avec patience) による「空虚な超越性」（フーゴー・フリードリヒ[96]）への高揚と失墜の「刑罰」supplice だけが，彼の存在感覚を刺激，燃焼させてくれる。彼は「偉大な罪人」le grand criminel[97] であり，とりわけ「刑罰のさなかで歌をうたった種族のひとり」je suis de la race qui chantait dans le supplice[98] でもあるからである。そして

この「刑罰」とは，おそらくは「映像のない宇宙」univers sans images[99]を進むところの神なき〈近代性〉modernité がもたらす「刑罰」，ヴァレリイ Paul Valéry が語ったような[100]，このうえもなく背反しあう諸原理の共存による混乱をその最大の特質とする〈近代性〉がもたらす「責苦」をも意味していよう。

Là pas d'espérance
Nul orietur
Science avec patience
Le supplice est sûr.[101]

しかし，果してランボーは，彼をして本質的に神なき神秘の探究にたずさわる近代詩人たらしめるところの，かかる「刑罰」に耐えることにより，その存在論的な「食欲」を回復させる「昔の饗宴の鍵」la clef du festin ancien, où je prendrais peut-être appetit を見出しえたか？あるいは，「ざらざらした現実」réalité rugueuse[103]を抱きしめる一個の「百姓＝不寝番」paysan＝veilleur として，彼を「喪」と「通夜」に追いやる「永遠の夜番」éternel veilleur を乗り超えることにより，新しい「場所と公式」le lieu et la formule[104]を見出しえたか？あるいは，『地獄の季節』の最終章「訣別」Adieu で言及された「輝く町」splendides villes[105]へ，ランボーは入ったであろうか？

「絶対に近代的であらねばならぬ」Il faut être absolument moderne[106]という，過去との「訣別」の意志を表わす言葉のあとで，「ところで，今は前夜だ」Cependant c'est la veille[107]と述べることにより，彼はこの問題がまだ宙吊りであることを示すであろう。だが彼の「前夜」veille は，決して終ることのない「前夜」，絶えず執拗に繰り返される彼の「出発」と相俟って，あらゆる夜を「前夜」と化しつつ永久に先へ向って更新され，延長される「前夜」ではなかったであろうか。しかもこれは，彼の行動と詩の，基本原理を表わすものだ。「輝く町」へ入ったところで，彼はすぐ

さま「見飽き，持ち飽き，知り飽きて」(assez vu...assez eu...assez connu[108])，その輝きを〈夜〉と見なし，その〈夜〉を出発の予感と，脱却の「前夜」に逸早く変えるであろう。ちなみに彼の「絶対に近代的であらねばならぬ」という要請と当為（あるいは欠如）の言葉にしても，その含意自体が実に曖昧であり，その読み方次第では，ショシャナ・フェルマン Shoshana Felman も指摘しているように[109]，近代という単に過渡的で相対的な時間を絶対化した矛盾の侵犯ととれなくはない。しかしたとえそうだとしても，その言葉に孕まれている「訣別」adieu への絶対意志が，絶対化された近代という目標追求の過程に於いて，「訣別」の終りなき反復を強制するはずである。換言すれば，彼の「訣別」へのかかる固執が，決定的で最終的な「訣別」や「出発」の不可能性を詩人自身にもたらすはずだ。「俺は出発しない」On ne part pas と書きながらも，驚くべきことには「不幸」にさえ「新しさ」(Ô monde! et le chant clair des malheurs nouveaux![110]) を要求しながら彼が絶えず「出発」を繰り返すのもこのためである。

それゆえ，ランボーの「前夜」veille というこの「不眠」veille の時間は，リシャール J. P. Richard が語ったところの「曙」aube の「特権的な瞬間，絶対的な初まり」(moment privilégié, commencement absolu[111]) の刻限に永久に先立つ時間，決定的な「訣別」や「初まり」の不可能性による絶えざる「出発」adieu を促す時間，「人間どもの戦いと同じくらいにむごたらしい精神の戦い」Le combat spirituel est aussi brutal que la bataille des hommes[112] が展開される終りなき苦闘の時間，絶えずその日をハイデガー Martin Heidegger の言うような「到達不可能なもの」sans-accès[113] への「前夜」と化して自らを「出発」に向けて更新し開きつづける，より一層の「ランボー的時間」l'heure rimbaldienne[114] なのである。たとえのちほどランボーが，アフリカの砂漠で稼いだ金銭の，不眠不休の「不寝番」veilleur になったとしても。

註

(1) Œuvres Complètes, édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1972, p. 3 (以下, ランボー原文は, これによる。)

(2) Ibid., Les Etrennes des Orphelins, p. 4.

(3) Jean-Louis Baudry: Le Texte de Rimbaud, Tel Quel 35, automne 1968, p. 50.

(4) R. de Renéville: Rimbaud le voyant, réedition, La Colombe, 1947. 東洋哲学, とりわけウパニシャド哲学との関連に於いてランボーを解明。

(5) Enide Starkie: Rimbaud, 3e édition, Faber and Faber, Londres, 1961. オカルティズムとの関連に於けるランボー解釈。

(6) J. Gengoux: La Pensée poétique de Rimbaud, Nizet, 1950. ヘーゲル, エリファス・レヴィの申し子としてのランボー解釈。レヴィの秘教的世界解釈の図式に合わせて, ランボーの多くの作品を五段階の発展形態のもとに説明。

(7) J. Richer: L'Alchimie du verbe de Rimbaud, Didier, 1972. 錬金術のタロットの象徴体系にランボーの作品を当てはめることにより, 精密な音韻上のアナロジーと含意の類同性の指摘を試みている。この書についての簡潔にして要を得た紹介と批判は, 渋沢孝輔氏「ランボーと昔の饗宴の鍵」(「オカルティズム」特集,「ユリイカ」, 青土社) を参照されたい。

(8) P. Caddau: Dans le sillage du Capitaine Cook ou Arthur Rimbaud le Tahitien, Nizet, 1968. キャプテン・クックの航海日誌を土台としてランボー作品を説明。

(9) M. Frankel: Le Code Dantesque dans l'œuvre de Rimbaud, Nizet, 1975. ランボーとダンテの関連に就いては, ボヌフォワ Y. Bonnefoy がその卓抜したランボー論 (Rimbaud par lui-même, Seuil, 1961.) に於いて軽く言及していたが, 本書の著者フランケルはそれを手がかりとして『神曲』のコードをランボー作品の中に読みとる作業を行う。なかでも『地獄の季節』をめぐっての著者の所論は, 主題が主題であるだけにそれなりの説得力を感じないわけではないが, その論の全般に関しては, やはり牽強附会の感を払拭しえない。

(10) アトレ・キタン「閉域, 開放, 空間化」(平井啓之氏訳)『ユリイカ』, 特集＝ランボオ, 11月号, 1976年, 184ページ。

(11) Une Saison en Enfer, Nuit de l'enfer, p. 100.

(12) Ibid., p. 93.

(13) Correspondance, Madame Rimbaud à sa fille Isabelle, 20 mai 1900, p. 797.

(14) Ibid., lettre à Demeny, 28 août 1871, p. 257.
(15) Ibid., lettre à Izambard, 25 août 1870, p. 238.
(16) Les Déserts de l'Amour, p. 159.
(17) 《Ouvriers》, Illuminations, p. 133.
(18) Soleil et Chair, p. 7.
(19) Une Saison en Enfer, prologue, p. 93.
(20) 《Angoisse》, Illuminations, p. 143.
(21) 《Vagabonds》, ibid., p. 137.
(22) Le Mal, p. 30.
(23) Les Corbeaux, p. 36.
(24) Une Saison en Enfer, Mauvais sang, p. 98.
(25) Ibid., Délires I, p. 102.
(26) 《Après le déluge》, Illuminations, p. 122.
(27) 《Métropolitain》, ibid., p. 143～p. 144.
(28) 《Fairy》, ibid., p. 146.
(29) 《Jeunesse II》, ibid., p. 147.
(30) 《Ouvriers》, ibid., p. 133.
(31) Fête de la faim, p. 83.
(32) 《Après le déluge》, Illuminations, p. 122.
(33) Le Bateau ivre, p. 69.
(34) Ibid., p. 69.
(35) 《Démocratie》, Illuminations, p. 154.
(36) Une Saison en Enfer, L'Impossible, p. 113.
(37) Ibid., p. 113.
(38) 『ツァラトゥストラはかく語った』, 浅井真男訳 (世界文学大系)「ニーチェ」, 筑摩書房, 1860年, p. 10.
(39) Une Saison en Enfer, Mauvais sang, p. 951.
(40) Mémoire, p. 88.
(41) Les Corbeaux, p. 36.
(42) Yves Bonnefoy: Rimbaud par lui-même, Seuil, 1961, p. 8.
(43) Les premières communions, p. 65.
(44) L'Homme juste, p. 55.
(45) Maurice Blanchot: 《Le Sommeil de Rimbaud》 dans La Part du Feu, Gallimard, 19, p. 161.
(46) L'Homme juste, p. 54.
(47) Cf. Œuvres. de Rimbaud, édition de Suzanne Bernard, Garnier, 1960, p. 441.

(48) Poésies, édition critique, introduction, classement chronologique et note par Marcel A. Ruff, Nizet, 1978, p. 144～p. 145.

(49) Antoine Adam: Notices, notes et variantes dans Œuvres complète de Rimbaud, Pléiade, p. 904. またこのプレイアドのアダン版では,「秩序, 永遠の夜番」の「秩序」L'Ordre が, なぜか小文字の L'ordre になっているのは, 他のもろもろの版と較べて理解に苦しむ。本稿では最新の Ruff の校訂版にしたがって, 大文字の「秩序」として扱った。

(50) Correspondance, lettre à Izambard, le 2 novembre 1870, p. 245.

(51) Voyelles, p. 53.

(52) Correspondance, lettre à Demeny, 15 mai 1871, p. 252.

(53) Le Bateau ivre, p. 67.

(54) Correspondance, ibid., p. 251.

(55) Daniel Rops: Rimbaud, le drame spirituel, plon, 1935.

(56) 《Soir historique》, Illuminations, p. 150.

(57) Une Saison en Enfer, Délires II., p. 108.

(58) Correspondance, lettre à Izambard, p. 251.

(59) 《Matinée d'ivresse》, Illuminations, p. 131.

(60) Ibid., p. 130.

(61) Bouillane de Lacoste: Rimbaud et le problème des Illuminations, Mercure de France, 1949, p. 224.

(62) 《Veillées I》, Illuminations, p. 138～p. 139.

(63) Maurice Blanchot, op. cit., p. 161.

(64) Une Saison en Enfer, Mauvais sang, p. 96.

(65) Ibid., Nuit de l'enfer, p. 101.

(66) Ibid., Délires II, p. 108.

(67) Ibid., Matin, p. 115.

(68) 《Nocturne vulgaire》, Illuminations, p. 141.

(69) Le Loup criait sous les feuilles, p. 89.

(70) 《Villes》, Illuminations, p. 137.

(71) Blanchot, op. cit., p. 163.

(72) Une Saison en Enfer, Nuit de l'enfer, p. 100.

(73) Ibid., Mauvais sang, p. 95.

(74) Ibid., Adieu, p. 117.

(75) Ibid., Nuit de l'enfer, p. 101.

(76) ランボーの後期韻文詩「渇きの喜劇」Comédie de la soif や「飢餓の祝祭」Fêtes de la faim. などに於いては, このような〈飲めない〉もの,〈食べられない〉ものと詩的主体との奇妙な疎外関係が描かれているが, さらに驚く

べきこととしては，〈飲む〉ことを切望する主体に於ける，次のような〈口〉の〈不在〉の視像があるのに留意すべきだ。

Chansonnier, ta filleule
C'est ma soif si folle
Hydre intime sans gueules
Qui mine et désole.

すなわち，たとえあり余る〈飲みもの〉に取り巻かれていたとしても，詩人の苦悩の〈寓意的相関物〉たる「飲む口もない内面の九頭蛇」は最終的には沈黙への意志とも重なる〈口〉の〈不在〉によって「やつれ悲しむ」のだ。けだし，〈飲めない〉もの，〈食べられない〉ものという事物自体の〈否定性〉に対するところの，主体の側の〈口〉の〈不在〉という〈否定性〉の関係，——この主題の解明は，ランボーの存在論的な〈食欲〉の回復ないしは〈消化〉の問題との関連に於いて別稿に譲ることにするが，ランボーの「風景飢餓」le désir de manger le paysage に於ける《oralité》の問題については，さしあたってはジャック・プレッサンの研究を参照されたい。(Jacques Plessen: Promenade et Poésie, Mouton & Cie, 1967, p. 71～p. 83).

(77) Cf. H. Mondor: Rimbaud ou le génie impatient, Gallimard, 1955.

(78) Une Saison en Enfer, Délires II, p. 106.

(79) 《Solde》, Illuminations, p. 145.

(80) たとえばランボーは『地獄の季節』の「不可能」に於いて，「ひとは精神によって神に赴く」Par l'esprit on va à Dieu と書いたあと，すぐに「身を裂かれる不運！」Déchirante infortune! と書いている。これは，〈肉体〉によってもなぜひとは神に赴けないかということの〈引き裂かれた〉関係への呪咀でもあろう。

(81) Le Loup criait sous les feuilles, p. 89.

(82) Suzanne Bernard: "Notes" dans les "Œuvres" de Rimbaud, Garnier, 1960, p. 449.

(83) Marc Eigerdinger: Rimbaud et le mythe Solaire, la Baconnière, 1964, p. 42.

(84) L'Eternité, p. 79.

(85) 《Matinée d'ivresse》, Illuminations, p. 131.

(86) Une Saison en Enfer, Délires II, p. 108.

(87) Correspondance, lettre à Demeny, p. 251.

(88) ジャック・リヴィエールも述べているように，ランボーは「純粋な直観に捧げられた存在」であり，「彼が知る時，それは殆んど知らないのと等しく，彼が語る時，それは殆んど知らないに等しい」のである。

また，ランボーに於いては，追求の対象との出会いの時は，常にといってよいほど〈感覚閉止〉か〈気絶〉の時であることに注意しよう。たとえば，次の「曙」Aube の終末部も，このことを端的に示していよう。すなわち，「気がついてみると」，一度かすかに触れたと思った対象は，既に去ってしまっている。

En haut de la route, près d'un bois de lauriers, je l'ai entourée avec ses voiles amassés, et j'ai senti un peu son immense corps. L'aube et l'enfant tombèrent au bas du bois.

Au réveil il était midi. (《Aube》, Illuminations)

(89) フーゴー・フリードリヒ著『近代詩の構造』飛鷹節訳，人文書院，1970, p. 75～p. 89.

(90) L'Eternité, p. 79.

(91) Cf. Jean-Louis Baudry, op. cit.

(92) L'Eternité, p. 79.

(93) Ibid.

(94) Madeleine Perrier: Rimbaud. Chemin de la création, Gallimard, 1973, p. 126.

また，ペリエは，「不寝番」あるいは「監視者」veilleur としてのランボーについて，次のようにも述べている。

Voir et ne pas être vu; thème cher à Rimbaud. Veiller. Observer., ibid., p. 53.

しかしわれわれは，ランボーがもう一方で「偉大な病人」として「見守られる」ことや「監視＝看護される」être veillé ことをも願っていたことに留意しよう。「熱い国から帰った兇暴な病人」として「女たちに面倒をみてもらう」ことが『地獄の季節』に書かれているし，初期作品の代表作「看護修道尼」に於いては，文字通り「慈愛の姉妹」Sœur de charité としてのやさしい女性に傷ついた心や体を「看護」veiller してもらう願望が述べられている。初期作品の「蚤を探す女たち」についても，同様のことが言える。また，自然＝女性にやさしく包み養って貰う願望もある。

(95) Une Saison en Enfer, Nuit de l'enfer, p. 100.

(96) Op. cit., p. 75.

(97) Correspondance, lettre à Demeny, p. 251.

(98) Une Saison en Enfer, Mauvais sang, p. 97.

(99) 《Jeunesse IV》, Illuminations, p. 148.

(100) Paul Valéry, La crise de l'esprit, dans Œuvres, Pléiade, 1957, t. I, p. 991～p. 992.

—Et de quoi est fait le désordre de notre Europe mentale?—De la

libre coexistence dans tous les esprits cultivés des idées les plus dissemblables, des principes de vie et de connaissance les plus opposés. C'est là ce qui caractérise une époque moderne., etc.

(101) L'Eternité, p. 79.

(102) Une Saison en Enfer, Prologue, p. 93.

(103) Ibid., Adieu, p. 116. 次の「百姓」も同ページ。

(104) 《Vagabonds》, Illuminations, p. 137.

(105) Une Saison en Enfer, Adieu, p. 116.

(106) Ibid.

(107) Ibid.

(108) 《Départ》, Illuminations, p. 129.

(109) Shoshana Felman, 《Tu as bien fait de partir, Arthur Rimbaud.》, dans Litterature, Larousse, Octobre 1973, p. 4.

(110) 《Génie》, Illuminations, p. 155.

(111) J.-P. Richard; 〈Rimband ou la poésie du devenir〉, dans Poésie et Profondeur, Seuil, 1955, p. 190.

(112) Une Saison en Enfer, Adieu, p. 116.

(113) Martin Heidegger: Aujourd'hui, Rimbaud....(une réponse à l'enquête de Roger Munier), Archives A. Rimbaud n° 2, Lettres Modernes, Minard, 1976, p. 14. ハイデガーの所論では，この「到達不可能なもの」は文字通り「到達不可能なもの」であるが，この「不可能なもの」の「隣接地域」proximitéに，「詩人」となった「稀有な人々」だけがたどり着くというふうに考えられている。

(114) J.-P. Richard, op. cit.